

第65回SGRA-Vフォーラム
 第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
 「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」

日 時：2021年1月9日（土）午後2時～5時15分（日本時間）
 方 法：オンライン（ZoomWebinarによる）
 主 催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

■概要

渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）では、2016年以来「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」円卓会議を4回実施してきたが、今回は初めて試みとしてオンラインで半日のプログラムを開催する。今回のフォーラムでは、3カ国の歴史研究者が近代史の中の感染症についての研究発表をし、東アジア地域の交流史としての可能性を議論する。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。フォーラム終了後は講演録（SGRAレポート）を作成し、参加者によるエッセイ等をメルマガ等で広く社会に発信する。

■テーマ「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」

東アジア地域で持続的に続く交流の歴史の中で、感染症の発生と流行が日中韓3国に及ぼした影響と社会的対応の様相を検討する。感染症はただ一国に止まらず、頻繁に往来した商人たちや使節などに因って拡散され、大勢の人的被害を招いた。感染症が流行する中、その被害を減らすために、各国なりに様々な対処方法を模索した。これを通じて感染症に対する治療方法のような医学知識の共有や防疫のための取締規則の制定などが行われた。この問題について各国がどのように認識し、如何に対応策を用意したかを見、さらに各国の相互協力とその限界について考える。

■プログラム

第1セッション（14:00-15:40）座長：村和明（東京大学）				
	歓迎挨拶	今西淳子	渥美国際交流財団	
	開会挨拶	趙珖	韓国国史編纂委員会	
韓国	発表(20分)	朴漢珉	東北亜歴史財団	開港期朝鮮におけるコレラ流行と開港場検疫
日本	発表(20分)	市川智生	沖縄国際大学	19世紀後半日本における感染症対策と開港場
中国	発表(20分)	余新忠	南開大学	中国衛生防疫メカニズムの近代的発展と性格
韓国	指定討論	金賢善	明知大学	
日本	指定討論	塩出浩之	京都大学	
中国	指定討論	秦方	首都師範大学	
第2セッション（15:45-17:15）座長：南基正（ソウル大学）				
	論点整理	劉傑	早稲田大学	
	自由討論	パネリスト（国史対話プロジェクト参加者） 韓国：李命美（慶尚大学）、金甫枕（嘉泉大学）、許泰玖（カトリック大学）、 崔姪姫（徳成女子大学）、韓承勳（韓国芸術総合学校）、 韓成敏（大田大学）、金キョンテ（全南大学）、鄭淳一（高麗大学） 日本：向正樹（同志社大学）、四日市康博（立教大学）、 青山治世（亜細亜大学）、八百啓介（北九州市立大学）、 大川真（中央大学）、平山昇（神奈川大学）、		

		大久保健晴（慶應義塾大学） 中国：鄭潔西（寧波大学）、孫衛国（南開大学）、孫青（復旦大学）、 彭浩（大阪市立大学）、李恩民（桜美林大学） ゲスト：明石康（元国連事務次長）、楊彪（華東師範大学）、 王文隆（南開大学）、段瑞聡（慶應義塾大学） オブザーバー：葛兆光（復旦大学）、祁美琴（中国人民大学）		
	総括	宋志勇	南開大学	
	閉会挨拶	三谷博	跡見学園女子大学	
※	同時通訳	韓国語⇄日本語：李ヘリ（韓国外国語大学）、安ヨンヒ（韓国外国語大学） 日本語⇄中国語：丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学） 中国語⇄韓国語：金丹実（フリーランス）、朴賢（京都大学）		

■タイムライン

9月8日（火）	発表者と同時通訳へ委嘱状の送付
9月30日（水）	発表要旨締切 国史対話5VのHP公開
10月12日（月）	Zoom参加登録開始
10月31日（土）	発表原稿締切
12月20日（日）	参考資料（図表、パワーポイント、読み上げ原稿）締切 発表論文翻訳版この日までにHPにアップ
1月9日（土）	国史オンライン対話

■「国史たちの対話」プロジェクトの経緯：

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月北九州にて、日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。ま

た、3回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論が行われた。

3か国語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図る。

■国史たちの対話レポートバックナンバー

第1回国史対話レポート「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/8730/>

第2回国史対話レポート「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/10611/>

第3回国史対話レポート「17世紀東アジアの国際関係－戦乱から安定へ」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2018/14261/>

第4回国史対話レポート「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2020/15991/>

■メールマガジンのバックナンバー

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>